

若手研究者コラムリレー

野上 玲子 (のがみ れいこ)

プロフィール

江戸川大学社会学部現代社会学科 講師
日本体育・スポーツ・健康学会の専門領域: 体育哲学

東京都生まれ
2004年 福岡大学スポーツ科学部 卒業
2006年 福岡大学大学院スポーツ健康科学研究科修士課程 修了
2018年 日本体育大学大学院体育科学研究科博士課程 修了
博士(体育科学)
東京学芸大学教育学部特任講師、日本女子大学人間社会学部助教を経て、
2022年より現職
E-mail: rnogami@edogawa-u.ac.jp



学位授与式@日体大

わたしの研究

オリンピックは何のために開催されるのか。

2021年9月、東京2020大会が閉幕しました。コロナ禍という恐怖と向き合い、どこまでも不安を拭き切れない中で大会となりました。しかし、この不安は決してウィルスに対するものだけではなく、どんなに国民が開催反対を訴えていようとも、強行に開催を推し進める日本社会の病理構造そのものに対する不安であることを覚えました。2030年札幌冬季大会を検討する前に、オリンピックと日本社会そのものの体質に目を向ける必要があります。なぜなら、開催国の民意に反する大会にどのようなオリンピックの精神が生み出されるのか、全く想像できないからです。

近代オリンピックは、スポーツを通じて世界平和に寄与することが理念とされています。東京2020大会を振り返り、アスリートの活躍に感謝しつつも、無観客開催となり、あらゆる面で混沌としていました。もはや、オリンピックに求めるものが何であるのか、オリンピックは何のために開催されるのか、その価値すら解らなくなってしまったように思えます。

2030年札幌冬季大会も「とにかく、開催する」という全体主義的な空気に覆われるとするならば、東京大会の教訓が全く活かされていないこととなります。全体主義的な状況はスポーツやオリンピックの周辺のみならず、日本の政治や経済、個人の生活基盤にまで影響を及ぼします。実に大きな問題であると言えます。

現在、このようなオリンピック(スポーツ)にかかる諸問題と全体主義現象との接点を探りながら、そこに潜在する問題の真意を明確化しようと思い、日々研究に取り組んでいます。

わたしの渾身の論文・書籍・記事

必読

Reiko NOGAMI (2020) "Totalitarian Sports Instruction in Japan"
Int. J. Sport Health Sci., Vol.18, 215-219.

(なんでも帳)

私のこれまでの人生の中で、「覚悟」を決めて挑んだことが3つあります。まさに、「野上三大覚悟」です。一つ目は、親の反対を押し切って東京から福岡の大学へ進学したこと。二つ目は、出産です。そして、三つ目は子どもが4歳を迎える時に、博士課程に進学したこと…ではなく、博士課程に進み、仕事と育児に追われ、論文が書けなくなり、イライラして、「一度でも子どもに手を上げるようなことがあれば博士課程は即、終了!」と決めていたことです。

博士課程に進学することは、子どもが保育園生活に慣れた頃を見計らって、と決めていましたが、果たして何足ものわらじを履いて生活できるのかどうかは未知の世界でした。幸い、指導教員の関根先生の理解、両親や夫の理解、同じ研究仲間にも恵まれ、突っ走ることができました。また、子どもも病気ひとつせず、一緒に歩んでくれました。

学会の託児所も活用しました。しかし、利用しているのは女性の研究者ばかりです。男性研究者の皆さん、学会の時は子どもと一緒に参加して、奥さんを家でゆっくり休ませてあげましょう! 周りは理解してくれます。子どもも喜びます。私の場合も、日体大の強面のお兄ちゃん達が優しく面倒を見てくれました。おかげさまでたくましくなりました(笑) そんな娘はもう小4です…。あつという間ですね。



日体大「体育哲学」メンバー

日本体育・スポーツ・健康学会 若手の会からのお知らせ

2018年8月に日本体育・スポーツ・健康学会若手の会が発足しました! → メーリングリスト登録フォーム:

<https://goo.gl/forms/zGMPdPq5fY3kcB5q2>

学会大会、研究会等の開催や報告者募集に関する案内、公募や助成金情報等に関する情報提供を配信予定です。皆様からも、メーリングリストで周知したい情報がありましたら、下記までご連絡ください。

taiikugakkaiwakate@gmail.com

